

## [資料] 静岡県伊豆半島における地名と津波浸水域・被害との関連

栄東高等学校\* 上村 勇輔・荒井 賢一

### Relationship between the Place Names and Tsunami Inundation Areas or Damage caused by Tsunamis in Izu Peninsula, Shizuoka Prefecture.

Yusuke UEMURA and Ken'ichi ARAI

Sakae-Higashi High School, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City,  
Saitama, 337-0054 Japan

In Japan, many place names come from geographical features. Some of them come from tsunami disasters. We wondered if place names were related to past tsunamis. 1703 Genroku Kanto, 1707 Hoei and 1854 Ansei Tokai tsunamis were subjects of this study and we chose, as subjects of this study, the areas which received damage by these tsunamis in Izu Peninsula, Shizuoka Prefecture, Japan. We conducted this study in three steps. First, we investigated the damage, the run-up heights and the submerged areas of those three tsunamis from preceding studies. Second, we examined place name's meanings, origins and the ways how they are pronounced in public libraries in the coast region of Izu Peninsula. Third, we compared the submerged areas with origins of place names. As a result of this study, we found there were 11 place names that clearly came from tsunami disasters such as Benten and Kujina. We also found there were 6 place names that were possibly related to tsunami disasters such as Shimekiri and Funada. However, in Izu peninsula some areas which got damaged by tsunamis did not have place names related to tsunami. In addition, place names related to tsunamis only express limited meanings about the damage of tsunamis.

Keywords: Place name, Izu Peninsula, Tsunami, 1703 Genroku Kanto Earthquake, 1707 Hoei Earthquake, 1854 Ansei Tokai Earthquake.

#### § 1. はじめに

歴史地震の研究者にとって古文書などの史料は身近なものであるが、その多くは難解で一般市民が活用するのは非常に困難である。市民に直接災害に対する警鐘を鳴らしうる史料として津波碑などの金石文があるが、市民の目に触れる頻度は多くても、その内容が認知されていないことや、風化や書体の違いによる文字解読のむずかしさが課題となっている。一方で地名は、誤った解釈や発音の変化といった弱点があるものの、市民が日常的に目にする事の出来る史料となりえ、内包されているその土地の風土や自然現象、歴史や伝説を読み取れる可能性を有する。

地名に関して、鏡味(1981)は「自然地名」と「文化地名」とに大別している。また、鏡味(1984)には、地名は「その地域が経てきた歴史を物語っている」旨が記されている。鏡味完二・鏡味明克(1977)においても、地名を「正直な過去を語る土地に記された文字」と位置付けている。谷端ほか(2017)は、津波由来の

地名が被災経験を伝承する可能性について検討した。その検討の対象とした『岩手沿岸古地名考』は、山奈宗真氏が1896(明治29)年三陸地震津波の被害状況を調査した際に収集した40箇所の地名とその由来を書き記した岩手県沿岸の津波地名辞典である。

これらを踏まえて、筆者は、地名が市民にとって身近で減災に役立つ史料の1つになり得るのではないかと考えた。そこで、地名が津波と関連しているのかを、主に地名分析と過去の津波による被害や津波による浸水域との比較という視点から考察した。研究にあたり、これまでに津波によって大きな被害を受けたことがある地域では津波と地名の関連性が高いのではないかと考えた。そのため、研究対象とする地名は、やみくもに津波に由来する地名を日本全国から集めるのではなく、南海トラフ地震及び相模トラフ地震に伴う津波によって、これまでに大きな被害を受けた静岡県伊豆地方沿岸部地域の地名の中から探した。なお、本研究は、上村・荒井(2019)が行った研究の調

\* 〒337-0054 埼玉県さいたま市見沼区砂町 2-77  
電子メール: amagi1945@gmail.com

査範囲である伊豆地方西部沿岸部から、伊豆地方沿岸部全域に拡大・発展する形で行った。

## § 2. 伊豆地方に被害をもたらした歴史津波の概要と既往研究に記述されている津波由来の地名

過去 300 年余りの間に発生し、伊豆半島に大きな津波被害をもたらしたマグニチュード 8 を超える地震は、元禄関東地震(1703 年 12 月 31 日【元禄十六年十一月二十三日】 M8.2), 宝永地震(1707 年 10 月 28 日【宝永四年十月四日】 M8.4), 安政東海地震(1854 年 12 月 23 日【安政元年<嘉永七年>十一月四日】 M8.4)であった[渡辺(1998)]. 図 1 は、伊豆半島における上記の 3 つの地震による津波の高さを表し、G, H, A はそれぞれ元禄関東、宝永、安政東海の各地震による津波の高さを示している。G は小野・都司(2008)と都司(2013)より、H は矢沼ほか(2011)

と羽鳥(1977)より、A は都司ほか(1991)および羽鳥(1977)よりそれぞれ引用した。伊豆地方沿岸部の津波の高さの傾向として、熱海から下田にかけての海岸部では相模トラフを震源とする地震による津波、下田から沼津市の井田までの海岸部では南海トラフを震源とする地震による津波によって高い波高が報告されていた。伊豆地方沿岸部の地名と津波の関連については、表 1 に挙げる文献の中で述べられている。ここでは主な研究について触れる。小野・都司(2008)及び都司(2013)は、元禄関東地震の被害状況を述べる中で、それぞれ伊東市宇佐美の「横枕」及び伊東市鎌田(現住所表示:宮川町)の「塚田」・「よこまくり」について津波との関連に触れていた。矢沼ほか(2011)は、宝永地震津波による被害の記述の中で、下田市三丁目の「七軒町」という特徴的な地名について言及していた。

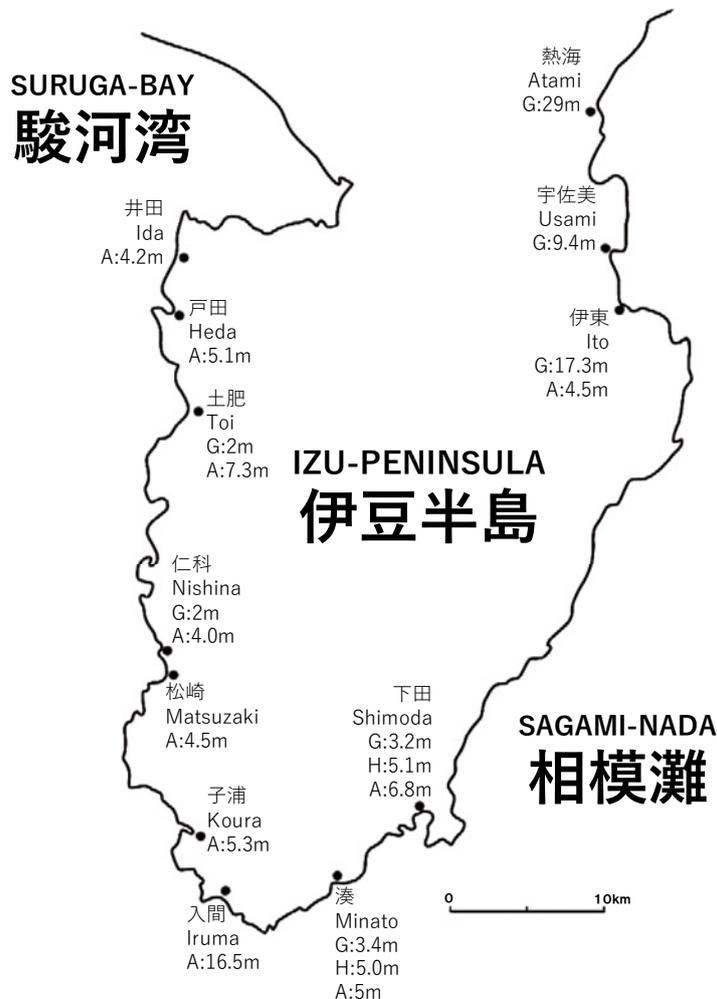


図 1 伊豆半島における 1703 年元禄関東地震, 1707 年宝永地震, 1854 年安政東海地震による津波の高さ (国土地理院地図を基に作成)

Fig.1 Height of 1703 Genroku Kanto, 1707 Hoei and 1854 Ansei Tokai tsunamis in Izu Peninsula. This map based on Geospatial Information Authority of Japan.

表 1 本稿で記述する地名の一覧(表の順序は伊豆半島を熱海市から沼津市まで海岸線に沿って時計回り)

Table.1 The place names described in this paper. The turn of this table is clockwise rotation along the coastline of the Izu peninsula.

地名(§)	所在地	地名の由来	由来の出典	備考
横枕 (§2)	伊東市宇佐美	津波の犠牲者がこの地で重なり合って倒れ、枕を並べるようにして死んでいたこと	小野・都司(2008), 都司(2013)	津波との関連性高い
塚田 (§2)	伊東市宮川町	この地に死体が流れ着いたため、死体を埋葬し、供養のため津波地蔵が建てられたこと	同上	津波との関連性高い
よこまくり (§2)	伊東市宮川町	津波による死体がここまで流れついたこと	同上	津波との関連性高い
櫓が淵 (§3.2(1))	伊東市宮川町	津波で押し上げられた船の櫓が取り残されたため	伊東市史編集委員会・伊東市教育委員会(2013)	津波との関連性高い
船洞 (§3.2(1))	伊東市宮川町	津波によって船がこの洞に上がったこと	加藤ほか(1983~1984)	津波との関連性高い
七軒町 (§2)	下田市三丁目	津波に流されずに残った家屋が七軒あった	矢沼ほか(2011)	津波との関連性高い
横枕 (§3.3(1))	下田市中	不明だが、類似した読みの地名に、由来・意味が津波に関連するものがある	なし	津波との関連に疑問
入間 (§3.2(2))	南伊豆町入間	谷などが入り組んだ土地という意味(津波に由来しないが、この特徴が津波を増幅させる条件である可能性が高い)	南伊豆町史会・南伊豆町教育委員会(2008)	津波との関連性高い
妻良 (§3.2(2))	南伊豆町妻良	不明だが、海岸線がえぐれて湾になっている様子を表しているのではないかと(津波に由来しないが、この特徴が津波を増幅させる条件である可能性が高い)	なし	津波との関連性高い
弁天 (§3.2(3))	松崎町 岩科南側	「弁天さま」という石祠が安政の津波で当地へ流れ着いたこと	松崎町史編さん委員会(2002)	津波との関連性高い
船田 (§3.3(3))	松崎町船田	往来津波の時に船がここまで打ち上げられたこと	同上	津波との関連に疑問
横枕 (§3.3(1))	松崎町伏倉	冬の風が吹きつけることを「風がまくりあげる」と呼んだことの訛か、昔海水がこの辺りまで来ていたので波が押し寄せたところという意	松崎史談会(1984)	津波との関連に疑問
メ切 (§3.3(2))	西伊豆町一色	大津波が仁科川をさかのぼり、ここまで来て止まったため	西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会(編)(1997)	津波との関連・所在地に疑問
鯨名 (§3.2(4))	伊豆市小下田	この地の松の木にくじらが引っ掛かったため	土肥町郷土誌編纂委員会(1994)	津波との関連性高い
中瀬 (§3.2(5))	伊豆市小土肥	津波や水害のあった後、浜の中に瀬が残ったため	同上	津波との関連性高い
平目ケ平 (§3.3(4))	沼津市戸田	何百年か何千年か前の大昔に地震があり、大津波が起こり、ここに大量のヒラメがあがったため	梅原(1977), 都司ほか(2013)	津波との関連・成立時代に疑問
よこまくり (§3.3(1))	沼津市井田	不明だが、類似した読みの地名に、由来・意味が津波に関連するものがある	なし	津波との関連に疑問

### § 3. 本研究で調査を行った津波に由来する可能性を有する地名

本章では、過去に襲来した津波に関連して名付けられた可能性を有する地名について記述をする。

#### 3.1 調査の方法

初めに、既往研究(福富(1936), 羽鳥(1977), 都司ほか(1991), 小野・都司(2008), 羽鳥(2008), 矢沼ほか(2011), 都司(2013))により、伊豆地方沿岸部の過去の津波による波高, 浸水域, 被害を確認した。対象とするのは、§ 2 で述べた元禄関東地震, 宝永地震, 安政東海地震による津波である。対象の津波をこの3つとした理由は、この時期の資料が比較的豊富に残されているためである。

次に研究で対象とした 10 の市と町(熱海市・伊東市・東伊豆町・河津町・下田市・南伊豆町・松崎町・西伊豆町・伊豆市・沼津市)の公立図書館において、2018年7月から2020年2月にかけて文献調査を行った。各地の地名に含まれる漢字や読み, 由来, 意味について調査した。それらの文献に引用として記載がある場合, 原則その引用元の資料を調査したが, やむを得ず引用後の資料を参考にした箇所もある。その結果を基に, 読みに基づく意味, 漢字から読み取れる意味, 地名に係る伝説や伝承, 読みや漢字の意味と実際の地形及び津波到達状況(津波の高さ・津波による被害)の比較といった観点から分析を行った。なお, 対象の地名は, 小字以上の地名(小字・大字・郡市町村名など)とした。

津波に関連した地名を持つ地点のうち, 先に述べている既往研究の中で取り上げられていない地点の一部については, 現地を訪れて周辺地形の観察と標高調査を行った。標高調査は, 既往研究と郷土資料を基に, 地名が示す地点において GPS を使用したスマートフォンアプリ Geographica による標高測定と国土地理院の電子国土 Web の標高測定機能による机上測定を併用して行った。

#### 3.2 津波と関連性が高い地名

本節では, 津波との関連性が高いと考えられる地名について, 伊豆半島の海岸線を熱海市から時計回りに東海岸から西海岸へと記述を進める。なお, 熱海市・東伊豆町・河津町においては, 津波に由来を持つ地名は見当たらなかった。ここでいう津波との関連性が高い地名とは, 地名の由来が津波やそれに起因

する現象によることを示す史料や伝承があり, それらと過去の津波の浸水域, 遡上高と照らし合わせて辻褄が合う地名を指す。本章で用いる地図は, 一部を除いて国土地理院の電子国土 Web から引用した(地名等を加筆している)。

#### (1)伊東市宮川町の「櫓が淵(ろがふち)」と「船洞(ふなぼら)」



図 2 伊東市街地地図(国土地理院地図に加筆)

Fig.2 Map of central area in Ito City. Correction on the map of Geospatial Information Authority of Japan.

伊東市宮川町のよこまくりを伊東大川方面へ向かったところに, 図 2 に示すように, 「櫓が淵(ろがふち)」の小字を持つ土地があった。伊東市史編集委員会・伊東市教育委員会(2013)によれば, これは津波で押し上げられた船の櫓(ろ)がこの地に取り残されたこと

に由来する。また、「櫓が淵」附近にかかる赤淵橋を渡った奥の洞のことを「船洞(ふなぼら)」と呼び、これも津波によって船がこの洞まで押し上げられたことに由来する[加藤ほか(1983～1984), 筆者注:伊豆新聞に連載されていたコラム「伊東豆風土記(地名)」を集約したファイルであり, 引用した「船洞」の内容は「伊東豆風土記(地名)」の連載第40回に記述がある。著者と発行年については, 伊東市立図書館のホームページにあるとおりの記載とした]。これら2つの地名の由来となった津波は不明だが, 小野・都司(2008)及び都司(2013)に記述されている「塚田(つかだ)」・「よこまくり」と「櫓ヶ淵(ろがふち)」・「船洞(ふなぼら)」は海からの距離・標高がともにほぼ等しく(GPS計測で4地点とも標高約17m), この4地名は同じ地区に存在する。

## (2)南伊豆町の「入間」および「妻良」

伊豆半島西岸に開けた集落は, 山地が海に迫り, これらの山々の間にできた低地がそのまま海に接するところが多い。図3は入間及び妻良・子浦の地形図である。「入間(いるま)」は湾の狭まった一番奥にある。一般に狭まった湾の奥では津波の高さが高くなるとされ, 安政東海地震津波ではこの知識を裏付けるように, 浸水高16.5mという数値が報告されている[都司ほか(1991)]。この「入間」という大字が, 読み・漢字共に谷などが入り組んだ土地という意味を持っており[南伊豆町史会・南伊豆町教育委員会(2008)], 典型的なリアス海岸の要素を持つ当地域の特徴を如実に表している。

妻良には江戸時代, 船番所が置かれていた(写真1・2:妻良区所蔵 浦方略絵図)。妻良区在住の郷土史研究家高橋福生氏によれば, 海の難所であった波勝崎に近かったため, 風待ちの湊としても賑わったという。また, 同氏によれば, 江戸時代以前, 妻良湾一帯は松下港と呼ばれ, その湾口は現在の位置ではなく宇留井島附近にあった。当時は, 宇留井島から真北に伸びた半島が形成されており堤防の役割をしていたが, 波による浸食や地震による崩落によって海に沈んでしまい, 現在のような地形になったという。そのため, 現在の妻良湾は当時の松下港の示す範囲の一部である。妻良湾は入間地区の集落のある湾奥に向かって狭くなっていく海岸線と異なり, つぼ状の形をしている。このためかは不明だが, 今村(1935)によると, 安政東海津波によって, 「妻良」にあった145軒のうち100軒が浸水したものの, 流失倒壊家屋は5軒

のみであった。死者はなく, 津波の高さは4.8mと測定されている。また, 対岸の子浦では150軒のうち浸水が100軒, 流失倒壊家屋が6軒, 死者2人であった。



写真1 浦方略絵図(南伊豆町妻良区所蔵)  
白線は航路を示している。

Photo.1 Urakataryakuezu. Owned by Mera ward, Minami-Izu Town.

The white lines in this photo show sea routes.



写真2 浦方略絵図の伊豆半島拡大写真  
丸は番所があった場所を示し, 白線は航路を示している。左下の丸の部分には「妻良」「子浦」と漢字で書かれており, 航路も描かれている。

Photo.2 Enlarged photo of Urakataryakuezu.

The circles in this photo show the areas which have guard station and the white lines around Izu peninsula in this photo show sea routes.

「妻良」は漢字の字面をただだけでは何を表しているのか皆目見当もつかない。海岸沿いにある「めら」という読みの地名は日本全国に点在している。大字としては、千葉県館山市「布良」、和歌山県田辺市「目良」などがあげられ、富山県氷見市中田附近にも「女良」という小地名が存在する。内陸にあるものとしては、和歌山県海南市「女良」、大分県大分市「米良」がある。南伊豆町「妻良」も含めて、前述の日本全国に点在する4つの「めら」はすべて海に面しており、えぐれて湾のようになったところにある。「めら」とは海岸が浸食されて減っている様子を「減る、少なくなる」という意味を持つ古語の「める」を変化させて表した可能性があると考えられる。



図 3 入間及び妻良・子浦の地形図(国土地理院地図に加筆)

Fig.3 The topographic map of Iruma, Mera and Koura. Correction on the map of Geospatial Information Authority of Japan.

### (3) 松崎町岩科南側の「弁天」

松崎町内では安政東海地震の時、松崎、江奈、道部、宮内の4地区で被害の記録が残っている。図4

は、ここで述べる松崎町内での地名の位置関係である。『安政及び寶永年度の南海道地震津浪に関する史料』[武者(1951)に収録]によると、松崎地区は190軒すべて、江奈地区は100軒のうち5軒、道部地区は130軒すべて、宮内地区は20軒中15軒浸水したが、流失倒壊家屋はなかった。「汐は中央部は大砂丘に妨げられ主としてえなの入江及那賀川河口方面より浸水せしが如し」とし、砂丘による微高地(図4に示す現在の松崎小学校附近、標高4m程度)の浸水はなかったとしている。羽鳥(1977)はこの記述を桜田の自身番まで津波が達したという口碑と、「全村浸水し、一時海原と化す」という別の記述を、松崎町中心部の浸水に関して支持し、松崎での津波の高さを4.5mと結論付けている。

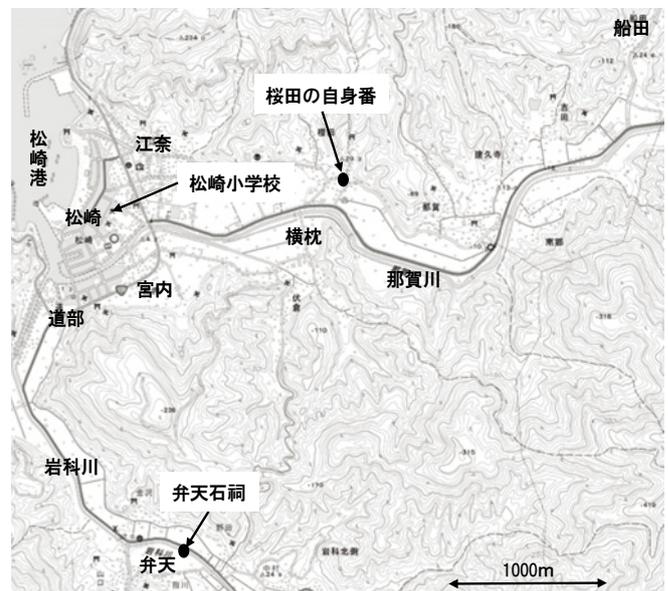


図 4 松崎町での弁天、船田及び横枕の位置(国土地理院地図に加筆)

Fig.4 The location of Benten, Funada and Yokomakura in Matsuzaki Town. Correction on the map of Geospatial Information Authority of Japan.

松崎町には、津波に関連する可能性が考えられる地名が「弁天(べんてん)」、「船田(ふなだ)」、「横枕(よこまくら)」の3つあるが、ここでは、岩科南側(いわしななんそく)の「弁天(べんてん)」について述べる。図5は「弁天」附近の拡大図である。河口付近で那賀川と合流する岩科川には河口から直線距離で2.2km内陸に入った川沿いに「弁天さま」という石祠(写真3)がある。松崎町史編さん委員会(2002)によると、弁財天を祀ったこの石祠が安政の津波で当地へ流れ着いたことが地名の由来となっている。伝承に登場する

事物が実在し、伝承とほぼ同じ場所に石祠があることから、この地名の由来の信頼性は高い。なお、この石祠附近の標高は地形図から 5.0m と判読された。



写真 3 松崎町岩科南側の「弁天石祠」  
Photo.3 “Benten Sekishi” in Iwashina Nansoku, Matsuzaki Town.

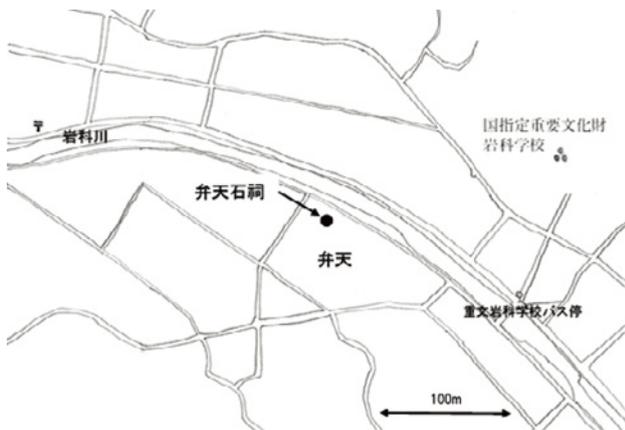


図 5 松崎町岩科南側の「弁天石祠」の位置(国土地理院地図を基に作成)

Fig.5 The location of “Benten Sekishi” in Iwashina Nansoku, Matsuzaki Town. This map based on Geospatial Information Authority of Japan.

#### (4)伊豆市土肥の「鯨名」

伊豆市土肥(旧土肥町域)の小下田地区には、「鯨名(くじな)」という小字が存在する。鯨名の位置は図 6 に示している。土肥町郷土誌編纂委員会(1994)によると、「鯨名」は「松の木にくじらが引っ掛かった」ことに由来し、駿豆学園脇のみかん畑のあたりを指す。この付近は標高 10m~20m 程度の傾斜地で、平時にくじらが打ち上げられる可能性は考えにくい。しかし、最も低い場所では GPS 計測で標高約 10m、海岸から約 150m であるから、ひとたび津波が発生すれば

この斜面を津波が駆け上がる可能性は非常に高い。よって大津波の時に、由来となった事象が発生したと考えられるが、宝永地震と安政東海地震では、津波が斜面をそれほど駆け上がった記録は残っていない。一方で土肥町郷土誌編纂委員会(2000)によれば、「鯨名(くじな)」から南西に約 300m の場所にある三島神社(みしまじんじゃ)は、本研究の対象地震から外れるが、明応地震[1498(明応7)年 遠州灘 M8.3 (羽鳥 1985)]の津波によって、三島神社より海側の低い位置にあった集落が壊滅し、その後集落が神社よりも高い位置へ集団移転したために参道が下り階段になった。なお、この三島神社は、明応の津波による被害を免れており、当地の標高は GPS による計測で約 34m である。また、壊滅した集落があったとされる場所は現在、水田となっており、水田の最上部の標高は GPS による計測で約 20m であった。このことから明応の津波はこのとき少なくとも 20m 程度の高さまで駆け上がったと考えられる。三島神社の至近にある「鯨名(くじな)」でも、津波の高さは同等であろうことから、この地名は、明応地震の津波でここに鯨が打ち上げられたことが由来となっている可能性がある。

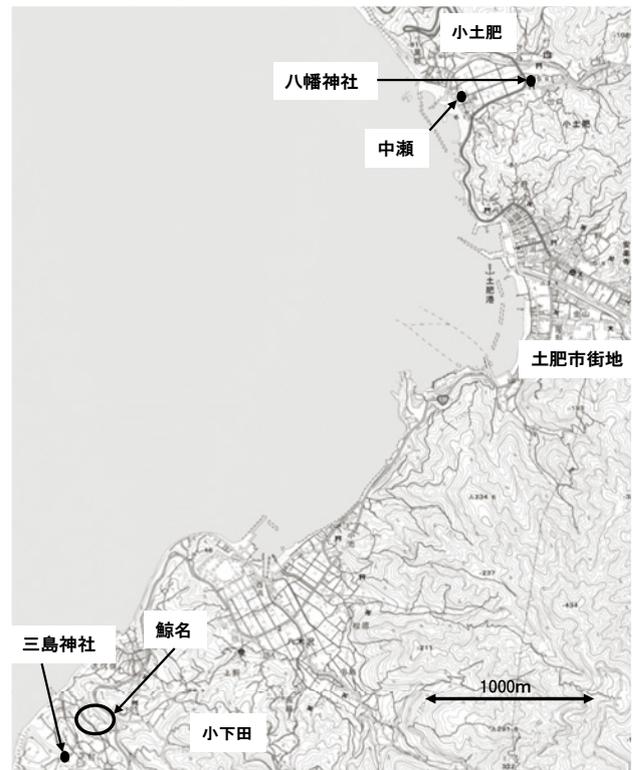


図 6 伊豆市旧土肥町域での中瀬と鯨名の位置(国土地理院地図に加筆)

Fig.6 The location of Nakaze and Kujina in old Toi Town. Correction on the map of Geospatial Information Authority of Japan.



をするに当り、地形の都合上幹線に平行に割ることの出来ぬ部分、即ち大部分の田地の上端に横に長い形の地面の出来たものを云うか」と考察している。

下田市の「横枕(よこまくら)」は、図 7 に示した中地区の現在の静岡県下田総合庁舎の附近を示す[伊藤(1966)]. この「横枕(よこまくら)」の明確な由来は判明していない。当地は海から稲生沢川沿いに約 1.2km 内陸にあり、福富(1936)が示した安政東海津波の浸水域の縁(地形図による計測で標高 7.0~8.0 m)と一致する。このため、無理やり解釈しようとするれば、宇佐美の「横枕(よこまくら)」と同じように津波によって死体が流れてきたことに由来すると考えることもできるが、そういった事実を裏付ける史料は見つけることができなかつた。

柳田(1936)の説はどうだろうか。国土地理院の地図・空中写真閲覧サービスを用いて、確認できる最古の地形図は 1971(昭和 46)年発行の 2 万 5 千分の 1 地形図、航空写真は 1963(昭和 38)年のものであった。これら进行分析すると、地形図、航空写真共に「横枕(よこまくら)」の附近は田畑であった。この事実とこの地区が山肌と道路の間の細長い土地であることを総合して考えると、筆者は、この下田市中地区の「横枕(よこまくら)」の由来を柳田(1936)の説のように開墾地の地割の際に出来た地名であろうと考察する。

ここで、沼津市井田の「よこまくり」の存在する地点について考えてみる。「横枕(よこまくら)」は、伏倉地区の東側にある小山の裾あたりのことを指す。横枕と自身番跡地の位置関係は前述の図 4 に示している。安政東海地震の津波浸水域の限界地点たる桜田の自身番跡地とこの伏倉の「横枕」は、海岸からほぼ同距離で、かつ那賀川を隔てて近いところでは約 300m しか離れていない。また「横枕」の標高も地形図による計測で 7.0~8.0m であり、自身番跡地の現地での GPS 計測による標高 7m とほぼ同等の高さであるため、津波が到達した可能性も捨てきれない。しかしながら、この一帯は現在に至るも水田地帯であり、山肌と道路との間にある。この点は下田市中の「横枕(よこまくら)」と重なる部分がある。このため、柳田(1936)の説も十分に考えられる。

一方、松崎史談会(1984)が述べる由来は、津波に由来する説とも、開墾地の地割による由来を主張する柳田(1936)の説とも異なるものとなっている。それは、冬の風が吹きつけることを「風がまくり上げる」と呼んだことがなまったという説や、昔海水がこの辺りまで来ていたので波が押し寄せたからという説である。

語源を「風がまくり上げる」とする松崎史談会の説について、筆者は「横枕(よこまくら)」の東側に隣接する小高い山に、海から吹いてきた風がぶつかって吹き上げることという意味で解釈した。一方で、「昔海水がこの辺りまで来ていたので波が押し寄せたから」という説に関して、標高 7m 程度の「横枕(よこまくら)」まで海岸線が内陸に進んでいたとなると、まず約 6000 年前の縄文海進(有楽町海進)が考えられる。この説の場合の問題は、この海水面の上昇がいつまで続いていたか、という点である。もうひとつ考えられる可能性としては、地震等の地殻運動によって松崎周辺が沈降・隆起した説が考えられる。しかしながら、縄文海進説、地殻変動説共に、資料等からその真偽は確認ができなかつた。

筆者は、海岸と河川からの距離、標高、地形から考えて、安政東海地震の津波が松崎町伏倉の「横枕(よこまくら)」まで来た可能性は高いと考察する。一方で、上述のように様々な説が考えられるものの、どの説も明確に否定することが難しいため、当地名の由来がどのようなものであるかについては断定を避ける。「津波によって死体が流れ着いた」などの津波被害の記述がある史料が見つけることができなかつたことから、津波被害を由来とする地名である可能性は低いと考察する。

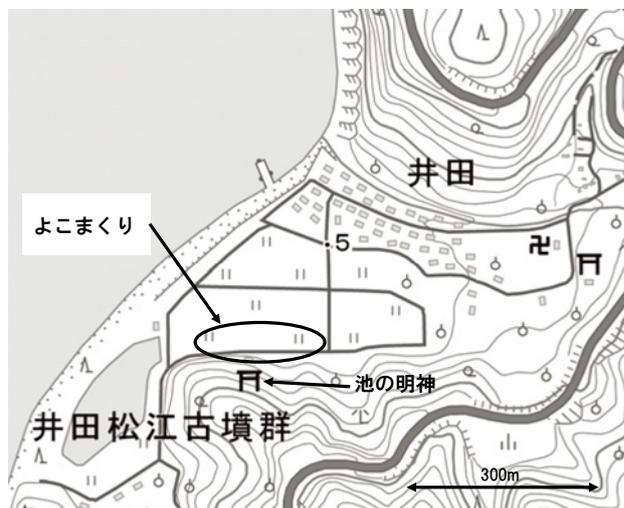


図 8 沼津市井田の「よこまくり」の位置(国土地理院地図に加筆)

Fig.8 The location of Yokomakuri in Ida area, Numazu City. Correction on the map of Geospatial Information Authority of Japan.

沼津市井田の「よこまくり」は、井田集落の南にある池の明神附近の一帯を指す。安政東海地震の津波は、図 8 において丸で囲った井田地区の池の明神前

の通りまで浸水があった[都司・斎藤(1985)]. この地点の標高は本研究で行った現地での GPS 計測によると 4.2mであった.

筆者は当初, この「よこまくり」が水田地帯の山際の部分を指すものであるから, 柳田(1936)の説が濃厚ではないかと考えていた. しかし, 調査を続ける中で他の「横枕(よこまくら)」は田畑の形が正方形や長方形といった整った形ではなく, 区割りで余ったと推測されるような山際にあるいびつな形の水田や区画であった一方, この附近の水田は, 比較的整った水田の形をしていた. 近代以降の耕地整理によって整った水田の形となった線も捨てきれないが, そのような事実を裏付ける史料を発見することができなかった. このため, 「成功開墾地の地割をするに当り, 地形の都合上幹線に平行に割ることの出来ぬ部分」を示す「横枕(よこまくら)」の読みが変化したものであると考えることは難しい. 他方, 伊東で見られた津波由来の地名と読みが類似している点と, 津波がここまで来たことを考えれば, 津波由来の地名の可能性も考えられる. しかし, この「よこまくり」が津波由来の地名と考えることができる根拠は, 上述の安政東海地震の津波が当地まで来たことしか見つけることができなかった. 井田の「よこまくり」の由来について, 本稿では断定しないが, 伊東市鎌田(現住所表示:宮川町)にある「よこまくら」と似通った地名が伊豆半島の反対側の沼津市井田に存在し, 安政東海地震でその地名が指す一帯が津波により浸水したことは, 事実である.

以上, 伊豆地方沿岸部に存在する「横枕(よこまくら)」と「よこまくり」を論じてきたが, 一番初めに仮説を立てた通り「横枕(よこまくら)」は伊豆半島において, 津波に由来する特異な地名ではなく, 由来は津波, 開墾地の地割などにいくつかに分かれていたと考えられる. また, 「横枕(よこまくら)」・「よこまくり」が, 同一の文字, 似た読みを持つことについては, 各地名に何らかの関わりがあるという資料は見つからなかった. 一方, 興味深いことに, どの地点も山際にあり, 津波が過去到達した可能性が考えられる場所にあったという共通点を有していた. 無論, 完全に津波と関係ないことを証明するのは不可能であり, 関連のある地名も存在するかもしれない. そのため地名研究の際, 視点が偏ることによってその解釈が大きく異なってしまうことが往々にしてある. そのため, 本節で述べたような似通った地名を分析する際には, 一層の注意を払わなければならない.

## (2) 西伊豆町仁科川流域の「メ切(しめきり)」

西伊豆町仁科川流域にも, 過去, 津波がどこまで遡上したかについて手掛かりとなり得る由来を持つ地名が存在する. これが, 現在の東京発電仁科川第三発電所附近を示す「メ切(しめきり)」という小字である. 西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会(1997)によれば, 昔大津波が仁科川をさかのぼり, ここまで来て止まったといわれ, ここで「メ切った」のでこのように呼ばれるようになった. 図 9 の最下方に示す仁科川河口からこの「メ切」まで 4.5kmあり, 標高は 30~40mであった.



図 9 西伊豆町仁科における先川, 寺川及びメ切の位置関係(国土地理院地図に加筆)

Fig.9 The positional relationship of Sakigawa, Terakawa and Shimekiri in Nishina area, Nishi-Izu Town. Correction on the map of Geospatial Information Authority of Japan.

自然現象は, 時に我々人類の想像を絶するようなものとなる. したがって, 「こんな内陸の, それも標高 40mもある場所まで来るなんてありえないだろう」というような安易な決めつけは避けなければならない. しかしながら, この「メ切(しめきり)」という地名の由来に多少無理があることもまた, 事実である. 根拠としては, 羽鳥(1977)が安政東海地震・宝永地震において, 津波の被害を受けたのは「メ切」から仁科川沿いに 2.5km下流の寺川地区までであると論じていること, 本稿の対象地震から離れるが, 福富(1936)は明応地震において, 津波が図 9 中に示した仁科の「寺川の

大堰」まで襲ったと論じていることである。

川を「メ切」とはどのようなことを指すのだろうか。川を締め切るといふ過程が必要となる事物として、筆者が考えたのは、木材運搬時に使用された「鉄砲堰」と農業用水確保のために堰を築くこと、治水工事の一環として行われる河川の流路変更であった。これらを加味して、「メ切(しめきり)」の由来について仮説を以下のように立てた。

- ① 水運のために河川を締め切っていたところ(鉄砲堰)に由来するが、伝承される中で津波の話が付随した。
- ② もともと明応地震において津波が到達したとされる「寺川の大堰」周辺を指していたが年月を経る中で、現在のメ切の位置だと誤って伝承されてしまった。

仮説①について、江戸時代、仁科川上流には天城山御林とよばれる幕府直轄地があったため、木材の運搬に仁科川の水運が利用され、鉄砲堰とよばれる川を堰き止め、一時に溜まった水を流してその流量をもって木材を運搬する手法もとられたのではないかと考えた。これについて、さいたま川の博物館(1998)によると、鉄砲堰は河川のほかに運搬手段が確保できない河川の上流部で用いるものであること、天城山御林のような幕府直轄の森林では御用以外での樹木の伐採は禁制とされており、鉄砲堰が用いられるようになるのは、商用利用が可能となった明治以降であることが多いという。実際に、西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会(1997)によれば、江戸時代天城山御林一帯には幕府が指定する九つの種類の樹木に関して御用以外での伐採が禁じられていた。加えて、仁科川第三発電所付近では、これより上流と比べて傾斜はなだらかであるうえ、川幅も拡大しつつある。また、天城峠方面へ続く道が江戸時代当時から存在した。このため、鉄砲堰が築かれた可能性は非常に低いものであると考察される。以上より、筆者は地名の由来として仮説①はあてはまらないと結論付ける。②の仮説について、「寺川の大堰」の「寺川」から述べたい。

寺川地区は、仁科川の河口から約2km内陸にある。その寺川地区から海岸方向に500mほど行ったところに「先川(さきがわ)」という地区がある。西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会(1997)によれば、「昔、仁科川の本流は今の学校側に流れており、寺

川より先に川が流れているので、寺川の人たちが先川と呼び、それが地名になった」という。同資料によれば、昔は大浜、浜(仁科港)に河口があったといい、実際に先川地区～仁科小学校前～大浜地区にかけては仁科川の旧流路を利用したと考えられる用水路がある。この「昔」が示す年代を特定することはできなかったが、この流路変更は自然的に発生したのではなく、近代以降、人工的に行われたことは確かである[西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会(1997)]。以上のことから、仁科川を農業用水確保のため、或いは、治水工事の一環として行われた、河川の流路変更時に旧河川を締め切った「堰」が寺川にあり、この場所のことを「寺川の大堰」と呼んだと考えられる。加えて、寺川付近まで明応地震の津波が浸入したことは福富(1936)により明らかである。

「メ切(しめきり)」という地名の由来自体は、川を締め切ったことであるが、由来が人々の間で伝承される中で「津波がここまで来た」という内容が追加された可能性が考えられる。また、西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会(1997)の中で述べられている「メ切(しめきり)」の場所(仁科川第三発電所付近)は、仁科川に水力発電所が建設された際に何かを「締め切る」工程があり、それが伝聞で伝わった結果、本来の「メ切(しめきり)」が示す場所(寺川地区)と混同して伝えられてしまった可能性も考えられる。

### (3) 松崎町の「船田(ふなだ)」

「船田(ふなだ)」は海岸から約5km内陸の那賀川沿いにある。前述の図4に位置を示した、船田集落入口の標高は地形図より20mである。この地名は津波の時に船がここまで打ち上げられたことによるという説と、船津氏が開いた集落であったため「船田」と名付けたという説が伝わっている[松崎町史編さん委員会(2002)]。なお、津波がこの「船田(ふなだ)」まで襲った記録は本研究で対象とした3つの地震では見つけることができなかった。

「船」という文字が表す内容によってこの地名の解釈・由来は大きく変わり得る。まず、松崎町史編さん委員会(2002)の「津波の時に船がここまで打ち上げられたことによる」という説を考えてみる。この説が正しい場合、船田に到達した津波は本研究で対象にした3つの地震よりも前の時代の地震による津波が考えられる。一つの候補が、前述の3.2(4)で述べた明応地震による津波である。明応津波は伊豆市小下田の三島神社において、標高20mの地点に到達したと推測

できるような記録があった。しかし、河口から4km内陸まで到達した可能性を示唆する資料は発見できなかった。明応より前の津波に関しては資料が少なく、どの程度の高さであるか分からないため言及は控えるが、船田まで津波が到達した可能性は低いと考えられる。したがって、船田が津波に由来する地名である可能性も低いと考えられる。他方、「船津氏が開いた集落である」という説は現在に至るも船田地区に「船津」姓があるため、信憑性が高いと考えられるが、明確に肯定できる根拠はない。こういった場合、安易に1つの結論を示すのではなく複数の説を示し、それぞれの可能性について言及することが肝要である。

#### (4) 沼津市戸田の「平目ケ平(ひらめがたいら)」

戸田には、図10に示す河口から約2.1km内陸の中上区椎木に「平目ケ平(ひらめがたいら)」という津波に由来する小地名がある。どの地震の津波によるものか明確ではないが、「何百年か何千年か前の大昔に地震があり、大津波が起こり、ここに大量のヒラメがあがった」ことに由来する[梅原(1977)]。この小地名においては、都司ほか(2013)の測量によれば標高36.4mとなる。



図10 沼津市戸田地域における「平目ケ平」の位置(国土地理院地図に加筆)

Fig.10 The location of Hiramegadaira in Heda area, Numazu City. Correction on the map of Geospatial Information Authority of Japan.

都司ほか(2013)は「平目ケ平(ひらめがたいら)」を明応津波に由来とするものとした上で調査を行っているが、伝承であるためその信頼度は低いと述べている。梅原(1977)は「平目ケ平(ひらめがたいら)」の由来となった津波の時代を古老の話として「何百年か何千年か前の大昔」と述べ、由来となる津波は不明としている。本研究では、この地名の由来となった津波が不明であるという前提で調査を行った。ここで疑問

となるのが、「何百年か何千年か前の大昔」はいつごろのことを指すのかということである。言い伝えは伝承の中で誇張・改変が時として起こってしまう。何百年前であればまだ信憑性は皆無ではないが、何千年前の話が口伝で伝わっていることは、日本においてあり得るのだろうか。ここでは、「何百年か何千年か」という記述を相当前の時期と捉え、仮に古墳時代ごろと考えた。戸田村(1969)には、戸田の地形図に加筆する形で古代の海岸線が示されている。これに基づけば、当時の戸田の海岸線は現在よりも内陸の地点にあったことが分かるものの、いつの津波であるかは依然として不明である。この地名から、伝承が現在の状況とは異なった状況において起こった事実を伝えている可能性を有することが分かる。

#### §4. むすび

伊豆地方沿岸部を対象に、津波に由来する可能性を有する地名を収集した。その結果、表1に掲載したように、津波に関連する可能性がある地名は17箇所見つけた。そのうち、地名の由来・意味が津波に関連し、歴史津波による浸水域や被害との整合性が高いものは、既往研究に述べられているものも含め11箇所あった。残りの6箇所は津波と関連が疑われる地名であった。しかし、津波に関連する地名の分布には偏りが見られ、熱海市熱海や南伊豆町青野川流域などでは過去に比較的大きな津波で被害が生じているにもかかわらず、このような地名を確認することができなかった。また、津波関連の地名があった地域でも、その示す内容は「ここまで津波が来た」などの限定的な伝承に留まっていた。

以上の結果から、いくつかの地名については津波に関連する可能性が高いと分かったが、これは伊豆半島においてであり、他の地域にも該当するかは分からないため、さらに他の地域でも本稿と同様の手法を用いて事例を集めて検討し、伊豆半島における事実と比較する必要がある。最後に、本稿で取り上げた津波由来の地名のほとんどが小字という住所表示や地図に記載されない小さな地名であったことから、今後日本全国で住所変更や市町村合併、過疎、集落消滅などの事由によって失われてしまう津波に関連する地名も考えられる。そのため、他の地域においても本研究のような調査・検討を、本研究を発展させる形で出来るだけ早急に実施したい。

## 謝辞

本研究の地名収集にあたり、熱海市、伊東市、東伊豆町、河津町、下田市、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、伊豆市、沼津市の各公立図書館において地名に関する貴重な資料の提供と多くの助言をいただいた。埼玉県立川の博物館の羽田武朗氏には、鉄砲堰に関する情報の提供と助言を頂いた。静岡県南伊豆町妻良区事務所においては浦方略絵図の引用を許可して頂いた。静岡県南伊豆町妻良区の高橋福生氏には、妻良に関して様々な情報を提供いただいた。また、本研究の文献調査に関して、筆者の父上村英央氏と、筆者の母上村瑞恵氏に文献調査の協力と調査費用の援助を頂いた。本稿の校正に際しては、英文部分の校正を栄東中学校の Lawrence A. Dow 氏、本文の校正を筆者の所属する栄東高等学校の篠田海遥氏をはじめ、鈴木隆仁氏、遠藤匠人氏、島村泉里氏、小松純大氏に協力頂いた。査読者および担当編集委員の行谷佑一氏からは、たいへん丁寧なコメントを頂き、本稿を改訂することができた。記してここにお礼申し上げます。

本研究は、調査費用の一部について武田科学振興財団より採択された高等学校理科教育振興奨励を受け行われた。

対象地震：1703 年元禄関東地震、1707 年宝永地震、1854 年安政東海地震

## 文献

- 福富孝治, 1936, 伊豆下田における過去地震津浪の高さ, 地震研究所彙報, Vol.14, 68-74.
- 羽鳥徳太郎, 1977, 静岡県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査, 地震研究所彙報, Vol 52, 407-439.
- 羽鳥徳太郎, 1985, 東海地方の歴史津波, 月刊地球, Vol.7 No.4, 182-191.
- 羽鳥徳太郎, 2008, 伊豆半島沿岸の津波累積エネルギー分布, 歴史地震第 23 号, 1-6.
- 戸田村(編), 1969, 戸田村埋蔵文化財 戸田の遺跡, 戸田村, 1.
- 今村明恒, 1935, 安政及び寶永年度の南海道地震津波に関する史料, 地震, 7, 291-298.
- 伊藤松之助, 1966, 下田町 土地宝典 其の一 静岡県賀茂郡(朝日・下田・稲生沢地区) 地番地積地目入図, 帝国地図.
- 伊東市史編集委員会・伊東市教育委員会, 2013, 伊東市史別編 伊東の自然と災害, 伊東市, 436pp.
- 鏡味明克, 1984, 地名学入門, 大修館書店, 279pp.
- 鏡味完二, 1981, 日本地名学 上 科学編, 東洋書林, 406pp.
- 鏡味完二・鏡味明克, 1977, 地名の語源, 角川書店, 390pp.
- 加藤清志【ほか】, 1983~1984, ふるさと再発見(フェイル)①伊東編 郷土を知るシリーズ (伊豆新聞からの切抜き).
- 松崎町史編さん委員会, 2002, 松崎町史 資料編 第 4 集 民俗編下巻, 松崎町教育委員会, 276pp.
- 松崎史談会, 1984, 松崎の地名, 松崎史談会, 6-16.
- 南伊豆町史会・南伊豆町教育委員会, 2008, 南伊豆の地名・民話・石碑, 南伊豆町教育委員会, 21.
- 武者金吉, 1951, 日本地震史料, 毎日新聞社, 1119pp.
- 西伊豆町教育委員会・西伊豆町誌編さん委員会(編), 1997, 西伊豆町誌 資料 第三集(民俗編 下巻), 西伊豆町, 210-248.
- 小野友也・都司嘉宣, 2008, [報告]元禄地震(1703)における相模湾沿岸での津波高さ, 歴史地震第 23 号, 191-200.
- さいたま川の博物館, 1998, 特別展図録「鉄砲堰ってなんだ」, さいたま川の博物館, 30pp.
- 谷端郷・村中亮夫・塚本章宏・花岡和聖・磯田弦, 2017, 山奈宗真著『岩手沿岸古地名考』の書誌学的検討と内容分析, 歴史地理学 59-2(284), 27-42.
- 土肥町郷土誌編纂委員会, 1994, 郷土誌叢書第 11 集 土肥の地名, 土肥町教育委員会, 156pp.
- 土肥町郷土誌編纂委員会, 2000, 郷土誌叢書第 16 集 土肥の災害誌, 土肥町教育委員会, 139pp.
- 都司嘉宣・斎藤弘士, 1985, 地元資料でみる沼津市, 戸田村の津波の歴史, 月刊地球, Vol.7 No.4, 192-203.
- 都司嘉宣・日野貴之・矢沼隆・岩崎伸一・北原糸子, 1991, 安政東海地震津波(1854 XII 23)の浸水高の精密調査, 歴史地震第 7 号, 43-55.
- 都司嘉宣・矢沼隆・細川和弘・岡部隆宏・堀池泰三・小網汪世, 2013, 明応東海地震(1498)による静岡県沿岸の津波被害, および浸水標高について, 津波工学研究報告第 30 号, 123-141.

- 都司嘉宣, 2013, 元禄関東地震津波(1703)の伊豆半島沿岸での浸水高, 津波工学研究報告第 30 号, 69-86.
- 上村勇輔・荒井賢一, 2019, [講演要旨]静岡県伊豆半島に被害をもたらした津波と地名から減災を考える, 歴史地震第 34 号, 251.
- 梅原弥吉, 1977, 続弥吉じいさん戸田のむかしばなし, いさぶや印刷工業, 12-45.
- 渡辺偉夫, 1998, 日本被害津波総覧 第 2 版, 東京大学出版会, 238pp.
- 柳田國男, 1936, 地名の研究, 古今書院, 368pp.
- 矢沼隆・都司嘉宣・今井健太郎・行谷佑一・今村文彦, 2011, 静岡県下における 1707 年宝永地震津波の痕跡調査, 津波工学研究報告第 28 号, 93-103.